

もうひとつのロンドン

ロンドンへの眼差し

CASABELLA編集部

参照 | 本誌 pp.2-7

ジョン・リースはBBCの「創造者」だった。彼は1940年に情報大臣、続いて公共事業・都市計画大臣に任命され、1942年にウィンストン・チャーチル内閣を非難して去るまで、その職務にあった。1941年にリースはロンドン州議会(LCC)に命じて、戦後における都市再建計画を策定させ、将来的な発展の法規制と方向付けを行わせた。計画案はパトリック・アバークロンビーとジョン・H・フォアショーに委ねられた。1943年に公表されたロンドン州計画は彼らの業績であり、1年後に、大ロンドン計画により6,743km²が対象地域となった。本稿ではこの計画の主要原理のひとつに言及しておきたい。それが、ロンドンの成長に伴い郊外に形成された、さまざまな地区を再建する必要性を考慮するよう導いた原則である。LCCの建築家たちによれば、これらの地区は、新しい学校や

中密度の集合住宅の建設をはじめとして適切で体系的なサービス施設を備えた、独立した拠点都市として整備すべきであった。計画策定者たちは「ロンドンは単体として考えるには巨大になり過ぎた」と主張し、同計画の目的は「既存の共同体のアイデンティティを強調し、それぞれの分離度合いを高め、必要な場所では明確に分かれた統一体として再編する」こととすべきと考えていた。挿図に示した計画案は、この原則の分かりやすい図解を示しており、ロンドンの地図がアメーバ状もしくはシャボン玉に似たものとして図像的に表現されている。この場合、計画策定者たちが意図せずして将来への配慮をもっていた証拠となると思われる。この図の作者はアーサー・リングで、LCCに参加する以前に、マックスウェル・フライやヴァルター・グロピウスと協働していた。リング同様に共産党員だったエルノ・ゴールドフィンガーも、LCCの仕事を望んでいた可能性がある。LCCの建築家らに劣らず、1940年のドイツ空軍のロンドン空襲による破壊は、ロンドンの発展計画をつくる機会になると確信したゴールドフィンガーは、

RIBA図書館司書の「ボビー」・カーターとともに、1945年に1冊のパンフレットを公刊した。挿図に示したページを見れば分かるように、それは効果的な方法で、ロンドン州計画が想定したものを広範な読者に向けて図解するものであった。

1943年から80年ほどが経った今も、LCCが進めた仕事は現代都市計画史に留まらない一里塚であり続けている。その影響を正確に測り、そこから派生した諸法規や事業の漸進的拡大のどれがどの段階かを確定するのは容易ではない。当然ながら、これに関する研究文献は豊富で、そこに立ち入る余裕はないほどである。この歴史を振り返る必要があるとCASABELLA編集部が判断した理由は、それが『CASABELLA』本号の編集担当者たちが設定した特集テーマ、「もうひとつのロンドン」を描写するための背景かつ試金石と見なせられるからである。特集に登場する建物や、その設計に携わった建築家たちが言及する出来事は、過去数十年間にロンドンを、歯止めの利かないグローバリゼーション



Fig.1: アバークロンビー、フォアショー「ロンドン州計画」、1943 | アーサー・リングによる図版



Fig.2: 「ボビー」・カーター、ゴールドフィンガー「ロンドン州計画」、1945 | 表紙



Fig.3: 同 | 新しい交通網と、
アイル・オブ・ドッグス(現カナリー・ワフ)を越えて拡張された内環道

が生み出した恩恵と信じたり、喧伝したりするものを俗悪な表現に変えた一連のイメージとは、似て非なるものである。カナリー・ワーフでは、かつてウェスト・インディア埠頭が占めていたアイル・オブ・ドッグス再開発地区に商業ビルや高層集合住宅が建ち並び、輝くような富が生まれ、顕示されている。これと比べれば、1943年の都市計画が独立した「都市」群に変えようとした住宅地に注がれる富は、ごくわずかでしかない。ロンドン周辺の住宅地の多種多様なアイデンティティを把握し、解釈し、再創出するために、建築はどのような場を占め、どのような役割を担えるかという問いは、本特集号に集められた作品と思想的に共通する。これらの作品群は、CASABELLA編集部のフェデリコ・トランファのコーディネートのもと、ロンドン建築財団会長のエリス・ウッドマンと、ロンドンがどのように変容したか、またロンドンの過去と消えつつある多くの特質の残滓を保存するために建築家に課された責務は何かについて、繰り返し論じてきたウィリアム・マンが、彼らが住む都市ロンドンにおいて建築家の職能が実践される方法の多様さ(またいかに変動しやすいか、と付けたい)を記録するためにも、選び出し構成したものである。中心と周縁、豊かさと貧困や地域社会との関係を持たない状態とが混ざり合った総体と見ると、ロンドンは確かに、ヘルマン・ブロッホが「メトロポリス」の意味を解いて書いたように「権威を失墜させられた無力な神々の都市、人々の野獣のような怒りの叫びが聞こえる場」に違いない。アパークロンビーとフォアショーが、合理的に編成された共同体の有機的総体に変えようと計画した、あの都市と同じではない。現代のメトロポリスでは、「セグレゲーション(分離・隔離)」という言葉さえ、LCCの建築家たちが使った



ものと大きく異なる意味を帯びてしまう。その一方で、彼らが使った「コミュニティ」と「アイデンティティ」のような言葉は、今日、壊れそうな裂け目に響くかすかな音でしかなく

【図版説明】

Fig.1：パトリック・アパークロンビー、ジョン・ヘンリー・フォアショー『ロンドン州計画』、ロンドン、マクミラン社、1943 | アーサー・リング、D・K・ジョンソンによるカラー図版1「社会的、機能的分析」

Fig.2：E・J・「ボビー」・カーター、エルノ・ゴールドフィンガー『ロンドン州計画』、ロンドン、ペンギン・ブックス、1945 | 表紙

Fig.3：E・J・「ボビー」・カーター、エルノ・ゴールドフィンガー『ロンドン州計画』図版 | 新しい交通網と、アイル・オブ・ドッグス(現カナリー・ワーフ)を越えて拡張された内環道

Fig.4：E・J・「ボビー」・カーター、エルノ・ゴールドフィンガー『ロンドン州計画』 | 1862年から1943年までのロンドン人口増加を表した図表

Fig.5：E・J・「ボビー」・カーター、エルノ・ゴールドフィンガー『ロンドン州計画』 | 1943年計画で想定された新たな緑地の図

Figs.6,7：E・J・「ボビー」・カーター、エルノ・ゴールドフィンガー『ロンドン州計画』 | 住宅ブロックの建物高さと、緑地の拡張の関係を現わした図表 | 新基準に従い改変された地区の例

Figs.8,11：ロンドン州議会建築家部局 | アルトン・ウェスト・エステート、ローハンブトン、ロンドン、1958

Figs.9,10：エルノ・ゴールドフィンガー | プレファブ部材を活用した住宅地の図、1942 | ロンドン、ハマースミス自治区、ブランドルハウ、ワンズワース、ウェストヴィルの各通りに建てる学校のために開発されたプレファブ・システムの機能

Fig.12：ロンドン州議会建築家部局、ロンドン、ラフバラ・ロード・エステート、1957

もうひとつのロンドン エリス・ウッドマン

参照 | 本誌pp.8-13

ロンドンでコロナ禍のパンデミックを生きるわれわれにとって、都市中心部を孤独に散歩する機会は不安を覚える新たな体験である。この2年間のほとんど、ロンドンの空港は、通常であれば——通過とはいえ——中心部の人口の大半を占めた観光客や世界各地からの留学生でごった返すこともなく、また以前は公務員や金融業界で働く人々で満杯だった毎日の通勤電車は、空席のままだった。何ヶ月もの間、ロンドン中心部はゴースタウンの様相を帯びたが、その周囲に広がる都市部の活気と比べると、より一層恐ろしい光景のひとつとなった。筆者が住む、ケンジントンのトラファルガー広場から数マイル南の地域では、公園は人々に溢れ、店やカフェは在宅で仕事を続ける客たちが集まり活況を呈していた。われわれが未来の職住をどう構成するかは、頻繁に危機を孕むトピックであり続けている。しかし今のところ、都市中心部はロンドンに暮らす900万人の生活にとって価値あるものと思われなくなった。

実際は、ロンドンは常に多中心都市であり続けている。ロンドンの大規模な拡張は、段階的な拡張の産物——ほとんどのヨーロッパの首都の成長を特徴づけるような——と言うよりも、19世紀前半の鉄道網の発展に続く複数集落の合併に大きく規定されたものである。パンデミック中にわれわれが経験した在宅ワーク革命により、ロンドンは今でも、家から近い距離内で日常生活の必要のほとんどを満たすことができる都市であることが誰の目にも明らかになった。村落構造は、ロンドンの異例なほど異種混交的な都市構成を結び付ける主要手段である600を^{ハイストリート}を超える目抜き通りに、今なお見いだせる。ロンドン住民の3分の2は、これら幹線道路から徒歩5分以内に住んでおり、この過去数十年で都市中心部に整備された広大なオフィス・スペースを合わせると、それらはロンドンの就業地の半分以上を占め続けている。

今回の『CASABELLA』特集号に掲載されるプロジェクトはすべて、このもうひとつのロンドンに位置している。各々は規模と予算を抑えているにもかかわらず、すべて公共建築であり、国際資本のアジェンダに急速に占められた都市中心部の外側に、豊かな集約的生活の条件があることを証明する。こうした地域では、1990年代に

「セントラル・サマーズ・タウン」 Camden, London, U.K.

設計=アダム・カーン・アーキテクト

参照 | 本誌 pp.24 -29

かつてロンドンで最も不潔な赤線地帯だったキングズ・クロスは、いまやクリエイティブ産業とデジタル産業の急成長する不動産開発のただなかに置かれている。しかし西に向かうと、隣接するサマーズ・タウン地区は古い時代のロンドンの生き残りのようだ。遅いのが品行方正な労働者階級のアイデンティティは、アイルランド系と後にベンガル系の家族に色濃く、貧困と過密の問題を一部覆い隠してしまう。「プロット10」は毎日の放課後と祝日に4歳から11歳の子供を預かる保育所で、働く親たちに不可欠なライフラインを提供している。1970年代に地元住民の手で設置された保育所は、狭苦しい小屋^{キャビン}にもかかわらず活力にあふれた冒険心を発揮している。かろうじて小さな運動場で練習しているサッカー・チームは、地元リーグで優勝した。威勢の良い母親や娘たちによって運営される「プロット10」は、このコミュニティにとっての岩盤である。

地元の自治区評議会が、建物を世代交代して、新たな社会的インフラストラクチャーとソーシャル・ハウジングを供給することを提案し、別に分譲住宅を建設して資金を集めた。イギリスにおける典型的な事業モデルである。マスタープランでは「プロット10」が別の場所に移動されたが、わずか数百メートルではあるものの、サマーズ・タウンの中心部からの移転は多大な背信行為と悲劇であることが判明した。そこでわれわれは、新たにマスタープランを抜本的に再編して本来の場所を維持することを提案し、マスタープラン策定者と建築主は勇敢にもこれを受け入れた。

遊び場と保育所は公園に沿って、中庭と部屋の縦列として配置され、18世紀のシャトーかオテル・パルティキュリエ〔前庭と中庭を備えた大規模な都市住宅〕のような豪華なファサードで連結された。

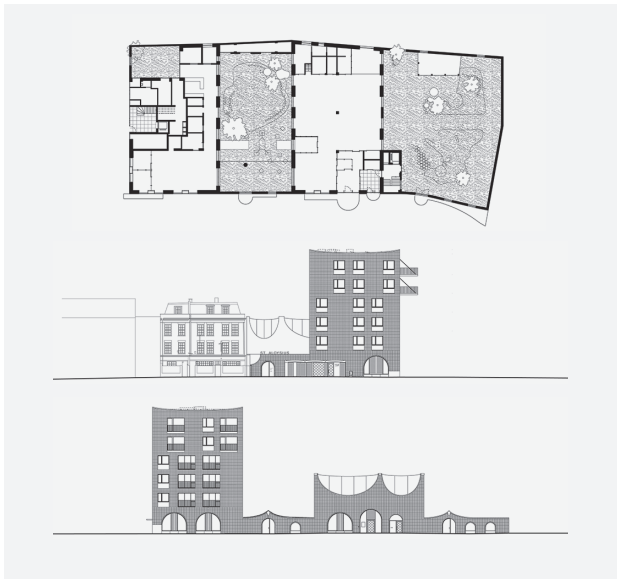
位階性の強い開口部が中庭に面して並び、深く穿たれた窓により、多くの厳格な保護規定とプライバシーの保護を静かに満たしながら、歓迎と活力を外に向けて発散している。正面にショーウィンドウのような窓を設け、子供たちの作品を住民向けに展示しつつ、その裏の教室を目隠しする。保育所のエントランス・ホールは、親たちが紅茶を飲みながらおしゃべりできるようキッチンになってい



歩道 / 公園側ファサード



配置図



平面図 / 立面図

る。屋上運動場は大きな反転アーチで囲まれた。このモチーフはロンドンの庭園の壁によく見られるものだが、拡大して用いることにより、公園全体をより大きなスケールで表現する。集合住宅の小さなタワーは道路の規模に合

わせつつ、繊細な性質を維持している。

内部ではこうしたスケールの遊びがさらに展開する。部屋は天井が高く、打ち放しコンクリートを使い、大きな窓が並ぶ。この頑丈なシェルは、ダグラスファー（アメリカ

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

積壁に載っている。この壁沿いに広場から公園に向かう小道が伸び、保育園の遊び場と住宅開発地との緩衝地帯を生み出している。これよりも小さい、西向きのキャノピーは長いロτζアとなって日陰をつくり、園庭と遊んだり走ったりできる屋内スペースとの間の境界を形づくる。広場に面して、黄色いキャノピーがコミュニティ・センターの入口に架けられ、階段で2階のホールに連絡する。工期の短さが無視できない制約だったため、CLT材を使った耐力壁と天井板は諸設備や配管とともに剥き出しとされた。CLT材の壁は白ペンキを薄塗した以外は手を加えず、室内に暖かさを伝えている。ファサードはライトグリーン色のファイバークラス製防水スクリーンで覆われ、木とアルミを組み合わせた黄色い窓枠やキャノピーのガルバリウム鋼板構造とコントラストをなす。

〔ディヴィック・カレン・アーキテツ〕

【プロフィール】

ディヴィック・カレン・アーキテツはロンドンで設立され、ヨーロッパを拠点とする建築設計事務所で、家具、建物から都市計画まで多様なスケールで活動している。公共機関や不動産開発業者からアーティスト、キュレーター、個人まで幅広いクライアントとの協働を重視する。われわれの仕事に通底するのは、快適で奇妙なまでに親しみ深いオブジェや空間への情熱であり、ニュートラルなフォルムと単純な建物の魅力である。われわれは、住む人の生活の質を向上させる良質でレジリエントな空間を創り出すことを目指している。学術研究として、特にロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート大学院で担当する講座を通して、太古から続くフォルムと機能の関係、あるいは建物の耐久性と用途の暫定性を研究している。

作品：ウェスト・グリーン・プレイス／保育園とコミュニティ・センター

設計：ディヴィック・カレン・アーキテツ—— Isabel Pietri, Alex Otiv,

Christopher Dyvik, Max Kahlen

マスタープラン：HTA Design

構造：Parmabrook

ランドスケープ：B|D Landscape Architects

工費コンサルタント：Tower Eight

設備：XCO2

キャノピー：Napex Fabrications

CLT構造：KLH UK

ファサード：Fibreline

建築主：Pocket Living Ltd and Haringey Council

BREEAM（イギリス建築研究財団環境性能評価）認証：Very Good

規模：延床面積 360m²

スケジュール：設計競技 2016年／

施工 2018-2019年／竣工 2020年

所在地：West Green Place, Haringey, London, U.K.



エントランス広場より見る



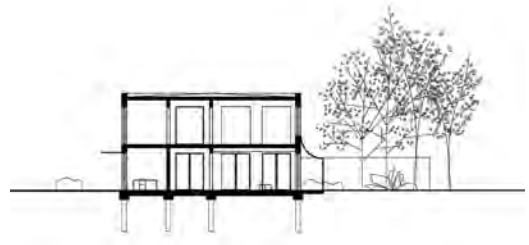
キャノピーを見上げる



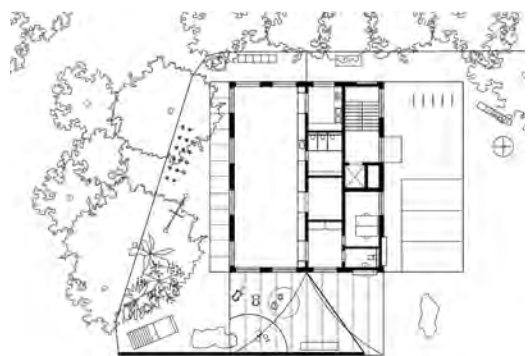
1階内部



2階内部



断面図



各階平面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

「ガーデン・ミュージアム増築」

5 Lambeth Palace Road, Lambeth, London, U.K.

設計=ダウ・ジョーンズ・アーキテクト

参照 | 本誌 pp.36-43

ガーデン・ミュージアムは、ランベス自治区に建つ世俗化されたセント・メアリー教会の内部に置かれており、建物全体は、イギリスの登録建造物制度のもと国が管理する「グレードⅡ*」に登録されている。2008年にわれわれは教会の内部に2層のギャラリーを建設し、それを機にミュージアム発展計画が急速に前進した。今回のプロジェクトでは新ギャラリー、教育普及室、倉庫を作り、旧身廊を催事スペースとして整備した。ギャラリーはCLTパネルで造られ、サステイナブルかつ復元可能であるため、歴史的コンテキストにおける環境デザインの挑戦によく合致した。ギャラリーの新築により、ミュージアムでは多岐にわたるイベントや教育活動を数多く実施し、新しい文化

的試みを展開できるようになった。初年度で前年比4倍の来館者数をたたき出し、ヒストリック・イングランド(イングランド歴史的建造物・記念物委員会)により旧教会建築の模範的利用例に挙げられた。2013年にわれわれの事務所は、既存建物の内部と屋外の教会前広場の双方にミュージアムを増築する第2期設計競技に勝利した。第2期は、ガーデン・ミュージアムにとって新しい公式の顔を作る機会となった。ミュージアムは、カンタベリー総主教公邸であるランベス宮に隣接する教会建築の内側に置かれているため、しばしば宮殿の一部と間違えられる。そこでわれわれが新築した建物は、ブロンズで覆った木造パヴィリオンのクラスターとしてミュージアムを拡張し、公道上に劇的に出現することにより、切望されていた都市的存在感を与える。新しいガーデン・パヴィリオンにより、多様な学習と共同体活動に使える大小の教育普及室と、カフェが用意された。ブロンズ仕上げのパヴィリオン群はガラス張りの回廊で連結され、この回廊がダン・ピアソンが

植栽した新しい庭園を取り囲む。パヴィリオン群の手前には新しく前庭スペースができ、既存のエントランス・ポーチを囲んでいる。前庭の植栽デザインはクリストファー・ブラッドレイ=ホールが担当した。新築の建物は重ね継ぎしたブロンズ・タイルで覆われ、建物を取り巻くプラタナスのうろこ状の木肌を反映する。プラタナスは王室付き植物蒐集家のジョン・トラデスカントによりイギリスにもたらされた。この人物が教会の墓地に埋葬されたことから、ガーデン・ミュージアムの構想が生まれたのである。教会内部に造られたCLT構造体の拡張により、ギャラリー空間、アーカイブ研究室、倉庫が増えた。

われわれの増築計画はノースヤード(教会とランベス宮庭園周壁の間の空間)にも及び、そこに新しい職員事務室とワークショップ、および裏方用設備が作られた。ミュージアム一帯の再開発は、多くの挑戦をもたらした。教会の敷地は重要な考古学的エリアであり、墓地のいくつかは保護指定されている。A級指定された樹木が9本あり、ラン



アプローチより見る



回廊より見る



旧身廊より見る